



図書館の恵み永きを願って

佐藤 宏

●利用者にとって一番有難いこと

私は十数年前まで本研究所で南アジア研究部門の一員であったから、図書貸出の便宜をうけている。その点では、利用者としては恵まれている。実際「閲覧」と「貸出」の間には享受できる便宜のうえで質的ともいえるほどのおおきな差がある。

図書の貸出という点では、私は区の図書館を通じて、都内の公立、都立図書館の貸出の便にあずかるほか（国会図書館所蔵図書は取り寄せのうえ館内閲覧）、区民に開放されている私立武蔵大学に加えて、幸いにも散歩圏内にある労働政策研究・研修機構図書館から外国語も含む専門書を借り出している。外国の専門誌のかんりの部分も両機関で閲覧可能である。定年を過ぎ大学などの研究機関に籍を置かずにとりか研究活動らしきものを続けられるのも、研究所をはじめ各種図書館の貸出制度の恩恵のゆえである。いま、一介の市民として国民健康保険証が唯一の身分証明書となった身には、こうした貸出制度の存在はしみじみ有難い。保険証一枚で国内の大学、研究機関の図書が取り寄せられればなお良いのだが。

●電子媒体は便利、不可欠だが

私自身の研究所図書館への訪問頻度は、

二カ月に一回程度である。往復に四時間はかかるので、事前の準備が時間の有効活用のカギになる。その点で、図書館の電子媒体による情報サービスの利用は不可欠だ。

まず図書館から毎月曜の朝に送られてくる新着図書情報「アラート・サービス」がある。気になるタイトルはメモしておいて次回の図書館訪問時に現物をチェックする。また、「雑誌記事索引」も前もって検索して情報を整理しておく。こうして準備していても所用を済ませるだけで時間がくる。世上「グーグル・ブックス」を頂点とする電子媒体の進歩は著しいが、自分の足で図書館を訪れ書架の林を散策する「知識の森林浴」ほど、気分を一新してくれるものはない。その機会が少ないのが残念だ。

雑誌記事索引について、数年前少し気になることがあった。検索をしているうちに気づいたのは、インドのある代表的な政治経済評論誌の記事が皆無であることだった。問い合わせしてみると、記事索引の対象から同誌がいつの段階から外されていた（その後回復していただいたが）。研究所の職員のように、現物へのアクセスが容易でない外部者にとっては、「アラート」や「雑誌」は調査研究へのかけがえのない手掛かりである。この一件が、図書館と研究部門の連携不足を意味していなければ幸いだが。

●知識の貯水池

利用者への恩恵に話が終始したが、貯水池が涸れては利水もなにもない。公共部門の改革と言うとサービスばかりに焦点が当てられるが、図書館は時代の知識の貯水池である。知識を蓄積し保存すること、つまり収集それ自体が知的な生産活動である。特に研究所図書館のように専門的な図書館の場合、たんに利用者への直接的なサービスの便宜のみに議論を集中させることは、長期的な運営の在り方を見失わせかねない。図書館活動にあつては、「失われた十年」などというのは禁句だろう。

対象地域の出版活動さらには言語や研究状況にも広く通じた専門的な図書館員がそろっているかどうか、そのための養成・研修が行き届いているか、図書館と研究部門の間に恒常的で密接な連携が保たれているかなど、貯水池機能の維持をチェックすることも、「改革」の重要な課題だろう。図書館運営は、「利用者のためにある」という受け身のあり方に傾きすぎないでほしい。まだまだ永く研究所図書館の恩恵にあずかりたいと望んでいるものの願いである。

(つづ) ひろし／南アジア研究者